

特別寄稿

「赤ひげ大賞」受賞を祝う

常任理事・情報広報部長

山科賢児

松田好人先生、第1回赤ひげ大賞受賞おめでとうございます。心よりお祝いを申し上げます。我々北海道医師会会員の仲間より受賞者が選ばれ、嬉しく光栄です。受賞を記念して寄稿していただいた『「赤ひげ大賞」をいただいて』を読みますと、松田先生の実践する医療活動と医療に対する斬新な考え方は医師会員を大いに刺激します。また、これほどまでに地域医療に情熱を持ち続け、連携する病院やスタッフとの信頼関係を築き、それぞれの役割分担を的確に行いながら診療する医師の姿に感銘を受けます。今後も地域医療の立て直しのための先進的役割をお願いします。

赤ひげ大賞について

日本医師会は、「現代の赤ひげ」と言うべき地域に根ざした「かかりつけ医」として、地域住民の日々の健康管理と診療を親身になって行っている医師を顕彰すべく、「日本医師会赤ひげ大賞」をこのたび創設した。この選考基準は以下のとおりである。

1. 地域住民が安心して生活が送れるようなまじりに寄り添った活動を長年にわたり行っている医師。
2. 原則として70歳未満の現役の医師

昨年12月の審議の結果、松田好人氏他5名が第1回「日本医師会赤ひげ大賞」を受賞した。授賞式は3月22日帝国ホテルにて皇太子殿下ご臨席のもと行われた。

上川北部医師会からの推薦書より（抜粋）

「患者さんや家族にとって何が幸せなのか？」と、常に第一に考えている医師である。平成17年に着任して以来、ただ一人の医師体制で、外来診療、在宅医療、特別養護老人ホームの嘱託医、ケアハウスや老人介護施設の入所者への訪問、学校保健医、予防接種業務、地域住民への広報活動など、幅広く活動を行ってきた。根底にあるのは、「一人ひとりに寄り添う」気持ちである。(中略)「この地域に住んで良かった」という声を多く聞くようになった。住民が安心して頼ることのできる医師がいて「生まれて死ぬことができるまち」となることを地域住民は求めている。松田医師は、そのことを実践し続けていく、わがまちの大切な「現代の赤ひげ先生」である。

「赤ひげ大賞」をいただいて



上川北部医師会
名寄市風連国民健康保険診療所

松田好人

北海道医師会の御推薦をいただき、「赤ひげ大賞」をいただきました。誠にありがとうございました。

医師会から、医療活動についてご報告するようご指示がありましたので、すこし誌面をお借りいたします。

名寄市は人口3万人弱、平成18年に名寄市と風連町が合併しましたが、旧風連町地区は4,500名で、高齢化の進んだ、一次産業（特産はもち米）中心の地区です。当診療所は旧風連地区では唯一の医科の医療機関です。名寄市には旭川以北地域の中核病院である名寄市立総合病院（一般300床、精神科165床）があり、車で20分と恵まれた環境にあります。

診療所は無床で、活動内容は外来（80名/日）を中心に、特養の嘱託医、各老人施設の定期訪問、在宅診療、学校医、監察医、産業医など、およそ医師がしなければいけない仕事をそれぞれは多くありませんが行っております。スタッフは、昨年7月から医師は2名体制になり、看護師は5名、技師、事務3名です。医療機器としてはレントゲン、上/下部内視鏡、エコーまでで、CTはありません。救急車は市立病院に直接搬送されています。

今回ご評価いただいた部分はおそらく、特養の嘱託医、各老人施設の定期訪問、在宅診療のところかと思しますので、もう少し詳しく書きたいと思います。

特養の嘱託医は旧名寄市、風連町の2つの特養があり、合計190名の入所者と、ショートステイが30名となっています。特養内で可能な治療は行っており、抗生剤、補液、酸素も使用できますので肺炎や尿路感染症など日々のごまごまとした疾患に対応しています。また、看取りも行っており、年間40名前後特養で看取りとなっております（全死亡者のほぼ80～90%に当たります）。市立病院と協力し、年間の延べ入院日数も、昨年度は各施設で100日程度と、担当する以前のほぼ10分の1程度まで減少しています。市立病院への外来受診数も正確なデータではありませんが同程度に減少しています。もちろん無理に受診させないというわけではなく、必要な疾患（重症肺炎、骨折、脳卒中、心筋梗塞など）は専門医の御高診を仰いでおりますが、医学的に安定と判断された時点で早期に退院となっております入院日数の短縮が進んでいるものと思います。市立病院はDPC導入病院であり、入所者にとっても病院は生活環境としてはあまり適した場所ではないため、両者にとっ

てメリットのある関係となっているかと思えます。

各老人施設の定期訪問は軽費ケアハウスに月に2回（1回20名前後・総勢40名）、グループホームに月に1回（20名）と重症者、急変時の往診となっています（グループホームでも年間1～2名の看取りとなる方がおります）。

在宅診療については、定期訪問者はバラつきがありますが20名／月前後で、急な往診が5～10件前後のことが多いです。昨年から2名体制になり、急な依頼や、旧名寄地区にも在宅診療に向く余裕ができたので、在宅診療は急速に増えてほぼ倍増しております。対象患者さんは多岐に渡って、癌の末期、老衰以外にも、札幌・旭川でのメインの治療の合間の体調管理や、市立病院からの補液の依頼や定期受診までのつなぎ、病院が嫌いな頑固な老人、などがあります。在宅での看取りは以前、2～3名／年でしたが、昨年から増加し8名／9ヵ月間となっております。

当診療所は、介護保険上のみなしの訪問看護ステーションにもなっておりますので、医師の訪問のほか、医療保険、介護保険を使用した訪問看護も20～30件／月前後行っております。

また、士別市のあさひクリニックと連携し強化型在宅支援診療所となっており、24時間看護師も携帯を持ち、医師も在宅、特養などに24時間対応となっております。実際に夜中（時間外ではなく、起きるのがつらい時間帯）の呼び出しは月に3～4回程度で、地域性もあって、患者さんのほうが遠慮してくださるのか、それほど過酷な呼び出し体制ではありません。

旧風連地区では唯一の医科の医療機関なのですが、無床であり、地域全体で、在宅や施設を最大限利用して、入院の代わりを果たしている…つもりです。ですが、なんとといっても中核病院である名寄市立病院のバックアップがあって何とか成立しているというのが実情です。ですから、少しずつですが、市立病院の専門の先生方の負担軽減につながるようにできることを積み重ねてきたつもりです。今後でもできることであれば、お役に立ちたいと思っています。また、小さな積み重ねでしたが、地域の方々も、徐々に、病院以外で亡くなることに違和感がなくなりつつあり、在宅や、施設での看取りが受け入れられてきていると思います。今後も末永く、ぼちぼちと、現状を続けられたらよいかと思っています。

…と、ここまでがお題をいただいたことへの活動の報告です。

もう少しスペースをお借りできそうなので、肩の力の抜けた、実態をお伝えしたいと思います。

特養での看取りや、医療行為に関しては、看護スタッフや介護員さんへの多大な負担の上に成り立っています。夜間帯、看護師は呼び出し体制ですので、介護員さんが少ない勤務者の体制の中、注意深く見守ってくれています。看護師も頻回な呼び出しのなか、必要に応じて医師を呼び出しますので、日々判

断を迫られることも多いようです。正直に言って、特定の人をずっと観察している、介護員さんや、看護師の観察力は2週に一度しか会わない医者よりはるかに鋭く、説明できないけど何か変というだけで脳梗塞などなど発見されることがままあります。看護師さんに関しても、病院受診の付添が減った分を、医療行為にさける時間が増え、それ以上に入所者にかかわれる時間が増えたことが、より満足度の高い介護につながっているようです。

在宅診療に関しては、医師のできることはかなり限られています。実際の療養や、家族の介護力の見極めなど、多くの部分を看護師さんが担ってくれています。また、患者さんからの連絡はまず看護師に行くので、必要に応じて、医師を呼ぶなど、在宅の現場では看護師さんが中心になって患者さんの生活を支えています。

じゃ…医者は…というところ…これらの行為の責任を取るためにいて、大まかな判断をしたり、医師からの説明という形でご家族に伝えたり、意思の確認をする、そのほか、医師でなければならぬ部分を担当しています。

このような実態ですので、あまり、医者が頑張っ…と…といった状況ではなく、周囲の医療関係者や、地域の方のありがたい支えが現状を可能にしています。

授賞式については、皇太子殿下がご臨席され、下々の者としては、皇太子殿下のお言葉をいただき会話するなんてどうしたものか…何を話したものだかよく覚えていません。周囲には偉い方々（医師会長、理事の方々）がたくさん居らしたのですが、私がいかに緊張していたのが伝わったのか、こちらが気を使わなければならないはずなのに…逆に優しくお声を掛けていただきました。貴重な一生に一度の経験でしたが、なかなか…田舎者には大変でした。しかし、この賞をいただいて、今思う最もよかったことは、往診している患者さんや地域の方がこのほか喜んでくれたことです。中身は何一つ変わっていないのですが、患者さんが妙に満足していただいているのを見ると、気分的には療養の足しになったかな～と思っています。

このような立派な賞をいただきにノコノコと都会まで行ってきましたが、実際に行っていることは、どれも当たり前のことばかりで、他の受賞者の方々もおっしゃっていましたが、「私よりももっと頑張っている先生がいるはず」と私も同感です。私の場合は地域のバランスや、年齢のバランスが考慮された結果と思っています。特別なことをしたわけでもなく…ですので…今回は、この賞の募集があったことを知らなかった先生も、次回は「われこそは！」というよりふさわしい先生のご推薦をと思っています。

私のような、若輩者を選んでいただいた北海道医師会の皆さまに、感謝しております。